

なぎさ NEWS さ



初夏の「西なぎさ」には ハゼがいっぱい

夏が近づき、「西なぎさ」で見られる魚の種類も増えてきました。6月の地曳網調査では、水温は4月に比べて約4℃高い22.7℃。あいにくの小雨が降る中でしたが、サッパやクロダイの稚魚など夏に見られる魚が採集されました。



10種類ものハゼが採集された

なかでも特筆すべきは、ハゼの仲間が10種類も採集されたことです。左の写真をご覧ください。この日の調査で採集された10種類のハゼを並べて撮影しました。写真が小さくてわかりにくいですが、上からマハゼ、アジシロハゼ、ヒメハゼ、ビリンゴ、エドハゼ、ウキゴリ、ニクハゼ、チチブ（と思われる稚魚）、シモフリシマハゼ（と思われる稚魚）、ヒモハゼです。

同じ種類の中で一番大きな個体を並べたのですが、採集されたものの多くがまだ子どもの小さな個体でした（右下の白線の長さが3cm）。25年前、人工的に作られた「西なぎさ」が、現在では稚魚の育成場所として大きな役割を果たしている事を実感できた調査になりました。

（飼育展示係 三森 亮介）

トビハゼの生息地を訪ねる — 東なぎさでのフィールドプログラム

6月29日、連続フィールドプログラム「東京の海を知る」の第2回目を「東なぎさ」で実施しました。ボートで上陸し、まず目に入るのは青々としたヨシの群落です。そして、その向こうに大きく広がる、潮がひいた干潟にはウミネコやカワウなどおびたしい数の鳥が休んでいました。オオヨシキリのギョギョシーという声だけが聞こえる静かな干潟を歩いていくと、しおだまりでは小さなボラやハゼがピチピチと跳ねます。圧巻は、ヨシ原に囲まれた泥干潟です。そっと近づき、遠目にしばらく観察していると、無数の土塊が、モゾモゾと動きだしました。何百匹ものチゴガニやヤマトオサガニです。そしてそのなかにこの日の主役であるトビハゼもいました。東京湾での生息数減少が心配されているトビハゼですが、この「東なぎさ」に少数ですがくらしているのです。泥そっくりの体色をしたトビハゼは、動かない限りその姿をとらえるのは難しく、みんな必死に目をこらして探しました。このプログラムのねらいは、実際にトビハゼの生息地を訪ね、そのくらしや現状を知ってもらうことです。参加者はとても東京とは思えない「東なぎさ」の景観と、そこにくらすトビハゼなどの干潟の生きものを実際に目で見て、強い印象を受けたようでした。（教育普及係 天野 未知）



※この観察会は、トビハゼ連絡会の協力を得て実施しました

なぎさ 生き物ミニ情報

●地曳網調査と生き物調査の結果

6月地曳網調査：水温は23℃とだいぶ暖かくなり、クロダイやトラフグの稚魚など初夏を感じさせる魚が採集されました。また、絶滅危惧種であるエドハゼも大量に網に入りました。

7月生き物調査：コメツキガニは繁殖期真っ盛り。ハサミを振り上げたり、メスを抱えて走るオスの行動が観察されました。しおだまりでは、5cmまで育ったマハゼがたくさん採集されました。

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、6月に行った地曳網調査と生き物調査の結果、そしてアサリの稚貝についてお伝えします。

●こんな生き物を観察してみよう「稚貝のわかる、泥の中」

潮がひいた「西なぎさ」で、柔らかい泥の中に手を差し入れて、そっと泥をすくってみましょう。ひとすくい泥の中に、たくさんの命が息づいているかもしれません。指のすき間から泥だけをふるい落としてみると、手に残るのは小さなアサリの稚貝です。貝の幅が5mmにも満たない、見落としてしまいそうな大きさですが、よく見ると一つずつ色も模様もちがいます。同じアサリでも、こんなにも個性的。好みの模様の稚貝を探すのも、楽しいですよ。

（教育普及係 小澤 鷹弥）



小さな小さなアサリがたくさん